鹿児島県立埋蔵文化財センター
Kagoshima Prefectural Archaeological Center

埋文だより

第6号

平成6年11月1日発行

古代へのタイム・トリップ！

Back to the ancient past

「見つけた！」 数千年を隔てた感動の出会いの瞬間です。 （国分市上野原遺跡）

配られた移植ゴテと手箕（てみ）を持っていよいよ発掘の開始です。

次々と土の中から現れる土器や石器に，あちこちで歓声があがります。

2時間という短い体験でしたが，きっと忘れられない思い出になったことでしょう。

歴史のふるさと県民セミナー『古代を探る』は，今年で2年目になりました。

写真は，7月30日に国分市上之段の上野原遺跡で行われた第3回の発掘体験学習の様子です。県内の小中学生と保護者ら107名が参加しました。

最新の出土品から（6）

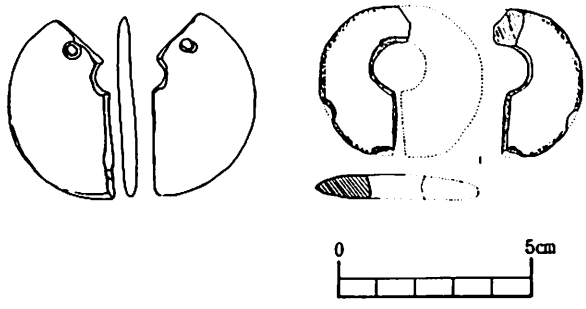
玦状耳飾

Split earring　　《仁田尾遺跡：日置郡松元町》

人間には，自分を美しく見せようとする本能的行動があります。それゆえ，すでに旧石器時代から自分の身を飾ってき，最初はきれいな石を使い，やがて土・骨・牙・歯・木・ガラス・銅・金・銀なども使ったようです。

松元町仁田尾遺跡は，旧石器時代から近世まで長期にわたって使われた貴重な遺跡ですが，ここで平成６年３月，蛇紋岩という緑色をしたきれいな石を使った耳飾が発見されました。これは半月形をした扁平な石の中央に溝を切り，その奥に孔をうがったもので，玦状耳飾と呼ばれています。

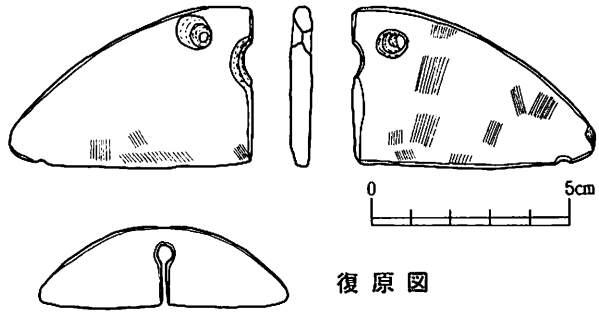
玦状耳飾は，日本では約6,500年ほど前に出現し，その後，全国各地で使われたようです。円形や角が丸くなった方形のものなど，いろいろな形のものがありますが，これらは時代，地域によって変わっていくといわれています。九州で発見されるものは円形のものが多く，他に縦長の角が丸くなった方形のものもあります。



笠沙町西之園遺跡(左)と金峰町上焼田遺跡で出土した玦状耳飾

九州ではこれまで３４か所の遺跡で出土していますが，このうち鹿児島県には１１遺跡あり，比較的多いと言えます。

仁田尾遺跡で出土した耳飾は長さ6.1cm，幅４cm，厚さ0.5cm，重さ20ｇありますが，半分に折れていることから，最初仕上がった時の長さ，重さは，この約２倍になります。石の性質をうまく利用して，まわりをていねいに整形しています。孔の部分は片方（図の左側）から根気強くうがち，最後に反対側から仕上げの作業をしています。左右のつながり部分が少ないため，使用途中で半分に割れたのでしょう。折れた部分を磨き，孔をうがって首飾に再利用しているようです。



仁田尾遺跡で出土した玦状耳飾

この孔は，当初の孔あけ作業に比べて雑で，きれいに仕上がっていません。また，紐ずれのあとも目立ちませんので，長期にわたって使われたものではないようです。

このような半月形をしたものは，鈴木重治氏の集成によると（「変革期の装身具にみる地域性」『同志社大学考古学シリーズⅢ考古学と地域文化』1987），隠岐島を含めた島根県と鳥取県だけ（６遺跡）でみられる特殊なものとされています。

最近，半月形の玦状耳飾は大分県でも発見されていますが，約6,000年ほど前に南九州と山陰地方との間になんらかのつながりがあったことを，この資料は教えてくれます。この交流がどのような意味をもつのか，今後に残された課題といえましょう。　　（池畑）

発掘調査紹介（6）

諏訪原遺跡

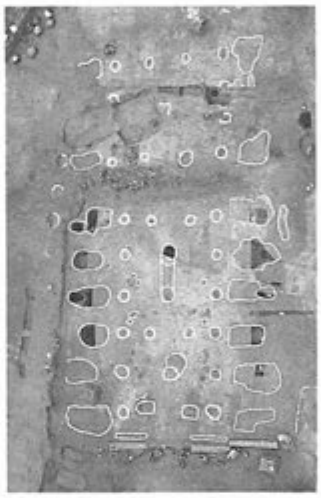
Suwabaru site　《所在地：薩摩郡宮之城町》

宮之城町の諏訪原遺跡は，標高約78mで，川内川左岸の河岸段丘にあります。

平成5年に，遺跡の有無についての発掘調査が実施され，本年度は記録保存のための発掘調査を行いました。

台地の中央部で建物跡が見つかりましたが，この建物は，配置や文献等から江戸時代に焼失した神社と考えられます。南北方向と東西方向にそれぞれ4本の柱がある神殿，南北方向に4本，東西方向に6本の柱がある舞殿・拝殿の跡が残っていました。柱の脇には，台風等の影響を防ぐため，建物を補強する支え柱の跡がありました。

遺物としては，縄文時代・弥生時代・古墳時代の土器片がわずかと，土師器や近世以降の陶磁器片や古銭（寛永通宝）・キセル・こうがい・釘等の金属製品が多く出土しました。（大野）



神社跡

甲突川川底遺跡

Kōtsukigawa-Kawazoko site　《所在地：鹿児島市》

鹿児島市内を流れる甲突川の玉江橋と鶴尾橋の間の川底から土器片が出てくることは，昔から知られていました。昨年8月，甲突川がはんらんし，大水害がおこり，川の改修工事が行われることになりました。そこで，鹿児島県教育委員会と鹿児島市教育委員会は，この2つの橋の間について，遺跡があるかどうかを確認するための発掘調査を行いました。調査は川底に鉄の板を打ち込んで発掘坑をつくり，中の水をくみ出しながら行いました。調査の結果，今から1,500年ぐらい前の古墳時代の土器片などが見つかりました。しかし，当時の人々の生活の跡は確認できず，遺跡は川の流れなどによって，こわされていることがわかりました。（井ノ上）

鶴尾橋から見た発掘風景

遺跡・遺物を保存する（1）

土層の転写

A specimen of strata

発掘調査によって遺跡から発見される住居などの遺構や，土器・石器などの遺物は，いちど掘り出してしまえば，元の状態にもどすことができなくなります。そういった意味で，発掘調査とは遺跡を破壊することでもあるのです。遺跡の保存のために，発掘しないで「現状保存」することもあります。

上野原遺跡の陥し穴土層断面

しかし，現代の人々の暮らしを便利にするために，工事などによって現状保存ができない遺跡があります。このような遺跡については，工事前に発掘調査を行う「記録保存」という方法がとられます。記録保存は文章・図面・写真などを用いた「発掘調査報告書」として保存されるのが普通です。そして，とりわけ大事な遺構や遺物は科学的な方法を用いてそのまま型取りしたり，壊れないように処置する場合があります。さきごろ黎明館で開催された「弥生紀行展」に展示されていた「王子遺跡の竪穴住居跡」も科学的な方法を用いて，現地で型取りしたものから復元したものです。

「遺跡・遺物を保存する」シリーズでは，科学を利用した遺跡・遺物の保存方法を紹介していきます。今回は遺跡の土層を写し取る「土層の転写」について説明します。

埋蔵文化財センターには「国分市上野原遺跡の陥し穴土層断面」や「市来貝塚の貝層」のパネルが展示されています。これらは，遺跡で実際に出土した状態のままはぎ取ったものです。

では，どのようにして土層をそのまま薄くはぎ取れるのでしょうか。簡単にいえば，強力な接着剤で布に貼りつけてあるのです。まずはぎ取る部分の土層を垂直に削り，その面を平らにし，接着剤を塗ります。次に接着剤が乾かないうちに布を貼りつけます。そして，接着剤が完全に乾いてから布をはがすと土層が布についたままはがれます。最後に水洗いをしたり薬品を表面に塗ったあとパネルにしあげます。

このようにしてはぎ取られた土層は，写真より迫力があり，実際に遺跡に行ったことのない人でも遺跡の土層についてひと目で理解できます。ただし，転写した土層は鏡に写った像と同じで左右が逆になります。　（児玉）

市来貝塚の貝層

精密分析室から（1）

赤い色の謎を追う

The red paint mystery

「おっ，赤い色がついているぞ。」

鹿屋市の榎崎B遺跡で発見された，縄文時代終わり頃（約2500年前）の土器を観察していると，表面に赤い色がついている土器に気づきました。内側にも外側にも赤い色が点々とついています。縄文時代の赤い色（赤色顔料）には，酸化鉄を主成分とする「ベンガラ」と，水銀を主成分とする「水銀朱」の２種類がありますが，この土器の赤い色もそのどちらかでしょう。一般に「ベンガラ」はやや暗い赤色をしており，「水銀朱」は鮮やかな朱色をしているので，肉眼でもある程度見分けることができます。しかし榎崎B遺跡の土器は，長い間地中に埋もれていたために，赤い色がすっかり剥げ落ちてしまい，ごくわずかしか残っていません。これではとても肉眼で見分けることは不可能です。そこでセンターにある分析装置（写真１）を使って，この赤い色が「ベンガラ」なのか「水銀朱」なのかを調べることにしました。

写真１　走査型電子顕微鏡とＸ線分析装置

まず土器の外側についている赤い色の部分を，電子顕微鏡で2000倍に拡大してみました。するとマカロニのようなものがいっぱい見えてきました。これは「パイプ状粒子」（写真２）と呼ばれている「ベンガラ」の一種です。次にＸ線分析装置で赤い色の成分を調べると，鉄分が多く含まれており，外側の赤い色はやはり「ベンガラ」であることがはっきりしました。今度は内側についた赤い色の部分を電子顕微鏡で拡大すると，砂粒のようなものが見えてきました。これは「水銀朱」の粒子（写真３）です。成分を調べても水銀や硫黄が多く含まれており，「水銀朱」であることを裏付けています。

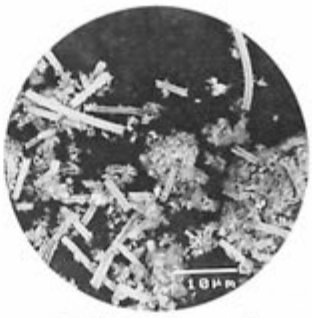


写真２　ベンガラ

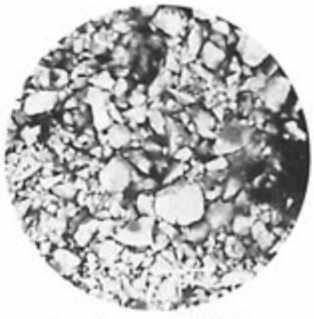


写真３　水銀朱

このように分析装置を使って，赤い色の種類を見分けることはできましたが，まさか外側は「ベンガラ」内側は「水銀朱」と，ひとつの土器に種類の違う二つの赤い色が使われていたとは，思いもよらない発見でした。これら２種類の赤い色を，なぜ表と裏に使い分けたのか，新たな疑問の残るところです。

赤い色の歴史はとても古く，鹿児島県内でも7500年くらい前の土器や耳飾りなどに，ベンガラが塗られているものがあります。「赤」は，明るく晴れやかな色であり，体から流れ出る血の色や，真っ赤に燃え上がる炎の色でもあり，大昔の人々には特別な思いを抱かせる色だったのかもしれません。

それにしても「ベンガラ」や「水銀朱」などを，大昔の人々はどこからどうやって手に入れたのか。赤い色にはまだまだ謎がいっぱいあります。　（大久保）

学習展示室から

弥生時代

Yayoi period

およそ2,400年前に大陸から稲作農耕を伴う新しい文化が九州北部に伝わりました。同じ頃，鹿児島県でも万之瀬川河口付近で稲作農耕が始まりました。金峰町下原遺跡では，縄文時代終り頃の土器と一緒に，石包丁と呼ばれる稲の穂摘み具や，籾痕のついた土器が発見されています。

弥生時代の土器は，煮炊きのための甕形土器・貯蔵のための壺形土器・盛りつけ用の高坏形土器などの種類があります。中期中頃までは，北部九州とほぼ同じ形の土器が作られましたが，それ以降になると，甕形土器の底があげ底になるなど，少しずつ独自の形をした土器が作られるようになりました。また，県内でも薩摩半島・大隅半島・熊毛地方・奄美地方と地域差が明らかになってきました。その時期と地域の違いによる土器の移り変わりは，パネルで示しています。

弥生時代の展示コーナー（埋蔵文化財センター）

この新しい文化は，石器にも影響を及ぼしました。石包丁や，板を作ってそれを加工するための柱状片刃石斧などは，大陸から新しく伝わったものです。木を切り倒すための磨製石斧は，縄文時代から引き続き使われます。縄文時代の終わりごろから多く使われていた石製土掘具が弥生時代中期までたしかに使われていることは，鹿児島県で鉄器の普及が他地域よりも遅れたという一端を示しているのかもしれません。

また，矢の先端にとりつける磨製石鏃も弥生時代の特徴的な石器のひとつです。縄文時代の石鏃は，石を打ちかいて作った小型のものでしたが，弥生時代の石鏃は磨くことによって先端を鋭くし，大きさも3㎝と大きいことから貫通力が増します。これは，動物を捕るためではなく，銅鉾や石剣と同じで，人を傷つけるための武器だったのです。

一方，稲作は安定した豊かな生活をもたらした反面，富める者とそうでない者との差をはっきりさせました。それは，個人のレベルを超え，ムラあるいはクニにも拡大され，戦争をひき起こすことにもなりました。鹿児島県内でも佐賀県吉野ケ里遺跡のように大きな溝を持つ集落が発見されており，磨製石鏃などの武器が住居内でみつかることから，緊張していた様子がうかがえます。しかし，権力の象徴ともいうべき青銅製の鏡の発見例が他地域よりも少ないことは，権力闘争に巻き込まれることが少なく，より平和的であったことを物語ります。

弥生時代は，約600年続きましたが，鹿児島県での遺跡数や出土遺物の数は，他県に比べてあまり多くありません。この原因として，弥生文化の中心地であった北部九州や畿内地方から鹿児島は遠く離れていたこと，さらにシラス台地が多いこの地域では水田に適した平野が少なく，生産性が低かったことなどがあげられます。弥生時代になっても石器を多く使ったり，貝塚を残すなど，自然と共存した豊かな生活を送っていたのでしょう。（東）

速報展のご案内

Information about the prompt exhibition

当センター１階の学習展示室では，県内各地から出土した600点以上の遺物の常設展示のほか，最新の発掘成果をいち早く県民の皆様に紹介する速報展のコーナーを設けています。

テレビ・新聞などで話題になった上野原遺跡（国分市）の壺形土器や九州最古の土偶，深さ３ｍもの巨大陥し穴の転写土層（４ページ参照）をはじめ，日本最古と思われる仁田尾遺跡（松元町）の陥し穴の型取り模型も新たに加わり，充実した内容になっています。

また収蔵室には大型の土器などが並べられ，実際に手で触れることができます。

歴史・考古学に興味のある方，個人・団体にかかわらず気軽に見学に来て下さい。（今村）

上野原遺跡の壺形土器を囲む見学者

発掘中の遺跡を見学に行きませんか？

Let's go for a field trip !

－Our excavation schedule－

仁田尾遺跡	松元町	H6. 4～H7. 3
フミカキ遺跡	〃	H6.10～H7. 3
小倉畑遺跡	姶良町	H6. 7～H7. 3
上野原遺跡	国分市	H6. 4～H7. 3
火ノ上山遺跡	上屋久町	H7.1月上旬～3月上旬
高天原遺跡	牧園町	10月中旬～11月上旬
栄田遺跡	串良町	10月下旬～11月中旬
松尾城跡	宮之城町	10月下旬～12月中旬
宮下遺跡	垂水市	11月上旬～下旬
横道遺跡	〃	11月中旬～下旬
宮ノ前遺跡	〃	H7.1月上旬～下旬
新平田遺跡	大口市	11月中旬～下旬
唐仁古墳群	東串良町	12月上旬～中旬
日守遺跡	西之表市	12月上旬～下旬
帖地遺跡	喜入町	H7.1月上旬～下旬
三角山Ⅱ遺跡	中種子町	H7.1月中旬～2月下旬

・ 発掘に関するお問い合わせは当センターへお願いします。

平成６年度　人事異動

Personnel changes in 1994

転出（４月１日付）

所　　長	大久保忠昭（県立野田女子高等学校へ）
次長兼総務課長	水口俊雄（県立鹿児島南高等学校へ）
調査課長	戸﨑勝洋（県教委文化課へ）
文化財研究員	関　明恵（国分市立国分南中学校へ）

退職（３月31日付）

文化財調査員	寺原　徹
文化財調査員	前村真次

転入（４月１日）

所　　長	内村正弘（県教委教職員課から）
次長兼総務課長	川原信義（県教委学校施設課から）
埋文センター調査課長（文化課主任文化財主事兼埋蔵文化財係長）	戸﨑勝洋（県教委文化課兼務）
文化財主事	西園羊二（南種子町教委から）
文化財研究員	森田郁朗（高山町立宮富小学校から）
文化財研究員	中原一成（県立薩南工業高等学校から）
文化財調査員	常田和彦
文化財調査員	菅牟田　勉

主なできごと

Highlights in the institute

◎歴史のふるさと県民セミナー

『古代を探る』

昨年度から始まったこのセミナー（年６回）は，前年度に引き続き好評で，第３回の発掘体験学習には，１頁に紹介したとおり多くの県民の方々に参加していただきました。

・第１回　５月14日㈯　参加者　51名
　オリエンテーション
　講座１「道具の考古学」（長野真一）
・第２回　６月11日㈯　参加者　49名
　講座２「祈りの考古学」（中村耕治）
　講座３「戦いの考古学」（東　和幸）
・第３回　７月30日㈯　参加者　107名
　発掘体験学習
　「古代へのタイム・トリップ」
・第４回　８月20日㈯　参加者34名
　講座４「大自然と考古学」（新東晃一）
　講座５「住まいの考古学」（前迫亮一）
・第５回　９月10日㈯　参加者　47名
　講座６「文様の考古学」（井ノ上秀文）
　講座７「隼人の考古学」（池畑耕一）
・第６回　10月８日㈯　参加者　38名
　講座８「南島の考古学」（八木澤一郎）
　講座９「私たちの考古学」（戸崎勝洋）

文化財保護強調週間
11月１日㈫～７日㈪

◎埋蔵文化財行政基礎講座（第１回）

６月22日㈬～23日㈭　受講者　127名
講師　文化庁文化財調査官　西田　健彦

市町村教育委員会の埋蔵文化財保護行政職員と開発部局等の一般行政職員を対象に，埋蔵文化財保護行政のしくみや，開発事業との調整について学ぶ講座を開催しました。

◎埋蔵文化財技術研修講座（前期）

９月27日㈫～29日㈭　受講者　32名
「発掘調査における写真撮影技術の向上」
講師　奈良国立文化財研究所　牛島　茂

遺物写真の撮り方

当センターでは市町村教育委員会の埋蔵文化財保護行政職員を対象に，発掘調査の技術向上を図るための講座を年２回（前・後期）開催します。今回は，発掘調査や報告書作成に欠かせない写真撮影技術について学ぶ講座を実施しました。

埋文だより　第６号
鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899－56
鹿児島県姶良郡姶良町平松6252
TEL　０９９５（６５）８７８７
FAX　０９９５（６５）８１１７